

## インフルエンザについて (2016年2月13日RV5 2017年2月6日 2018年2月21日)

### インフルエンザの流行状況

インフルの流行は早く当院でも12月4日からインフルエンザA第1例、Bの流行開始が早く2018年2月20日現在インフルAの約3倍の頻度でインフルBの罹患がみられます。

2018年のインフルエンザ予防接種予約は8月開始です。2017年点鼻生ワクチンFluMist接種者100名からインフルBは今迄確認されず極めて有効でした。毎年のインフルエンザ予防接種が勧められていますが、毎年の予防接種が効果減弱の可能性も指摘されています(N Engl J Med 375:1261-8, 2016.)。このため当院では8歳以上のインフルエンザ予防接種は、米国同様、前年接種の場合1回でも良いとして対応しています。

#### 1. 症状

インフルエンザの症状は、通常の風邪(上気道炎、あるいは鼻風邪、ウイルス感染症とも説明します)と全気道炎の症状である咳、鼻とともに、**悪寒**、急激な発熱、**筋肉痛**、全身状態の悪さ、高頻度の異常行動の発現で異なるといわれています。インフルエンザは、A、B、Cの3つの型があり、症状の重症度はA>B>Cの順です。通常インフルエンザの季節の終わり3月ごろB型が多くなります。潜伏期1-3日で、鼻とその奥に感染します。中耳炎、直接侵入を含む肺炎、急性脳症に至ることもあります。インフルエンザは、発熱後48時間以内治療開始が良く、多くは発熱10時間以上しないと診断できないので、冬季は、発熱翌日あるいは2日以内の受診をお勧めします。**夜間発熱時或いは土曜日午後休日の急な発熱で救急受診は不要です。**

#### 2. 鳥インフルエンザが何故怖いのか

鳥インフルエンザが恐ろしい理由はヒトに感染すると、いきなり死亡率の高い肺炎を起こすためです。本来、鼻咽頭に感染すべきインフルエンザが何故、いきなり肺に感染するのでしょうか？鳥の体温は哺乳類より高く42度だそうです。鳥のインフルエンザは温度の高い肺に直接入るようです(人インフルは鼻咽頭)。

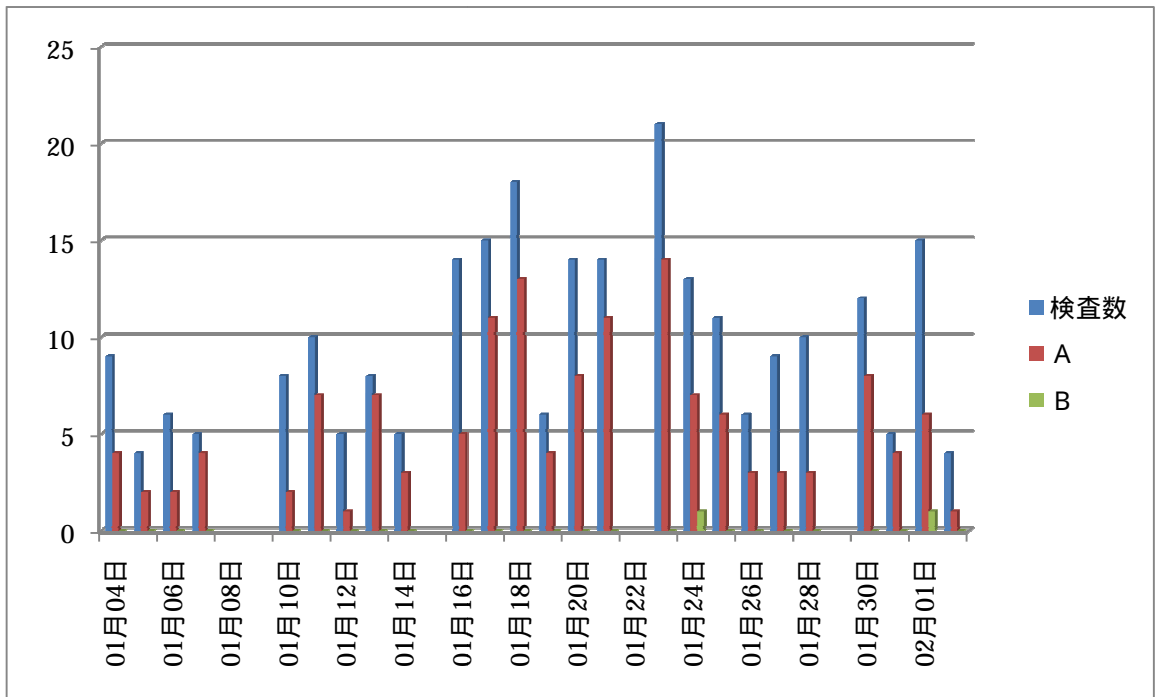
#### 3. 治療

治療としては、発熱48時間以内のタミフル5日内服が最善の治療法でしたが(吸入製剤よりトラブルが少ない)、1回の吸入(「イナビル」吸入粉末剤20mg、第一三共国内開発)あるいは1回注射の薬剤(「ベラミビル」ラピアクタ)も開発されています。小児でも使えます。タミフルは解熱しても5日内服してください。解熱後最低2日の自宅療養が必要とされています。**抗生剤の併用されることが多い疾患ですが、必要ない抗生剤投与はインフルの肺炎を増加させる報告があります。**2010年度の開院初年約100名のインフル症例で初診時溶連菌との2重感染2名、後日肺炎合併2名の4例のみ抗生剤投与、投与しないほぼ全例タミフル投与後24時間以内で解熱しました。その後もインフルとの2重感染合併症は同様の割合です。

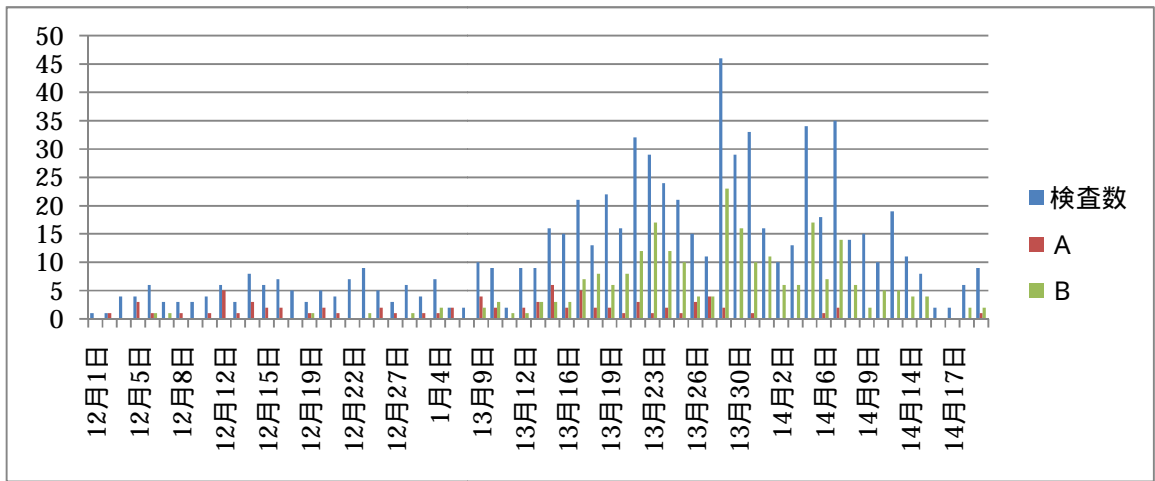
#### 4. インフルエンザワクチンについて

インフル予防接種は1994年から接種率が著しく低下しました。結果としてインフルエンザによる急性脳症が多発し、私も多くの症例に関係しました。その後インフルエンザワクチン接種推奨され脳症は激減しました。ワクチン副作用は、接種後の腫れと発熱等が主体です。他のワクチンとの同時接種も可能です。当院では2012年度から、点鼻弱毒生ワクチンを導入しました。米国から輸入するワクチンで、2013年から4価(Bが2種類)とBに対する阻止効果が増強されました。インフルエンザウイルスを低温培養し弱毒化したものです(先ほどの鳥インフルの逆)。弱いインフルエンザに感染させ免疫をつけるため、鼻水・頭痛

等の副作用が強く出て日本人には耐えられないとされ日本では導入されなかった様です。しかし、このワクチンは鼻粘膜でウイルスを阻止するため、不活化の注射ワクチンはインフル阻止率が 50%程度に対し 80%程度とされ、生ワクチンなので効果の持続は 1 年です。受験を控えた方今年度はインフルに罹りたくないと祈念する方には試す価値があるかもしれません。適応年齢は 2-49 歳です。ワクチン被害補償は輸入業者のものになり(当院は Monzen 社から輸入)国の補償額の半分程度です。2014 年 9 月米國小児科学会は小児のインフル予防接種第一選択は FulMist で不活化ワクチンは FluMist がない場合としました(Pediatrics 134 number 5,2014,online first)が、**2017 年 9 月は FluMist の優位性を否定しどちらでも良いとしました。先ほど述べたように今シーズンはFluMistは著明な予防効果を示しています。**



2017 年の状況



2018 年の状況